津久見市の小児医療・小児保健の向上を目指して

子どもの健康と病気の予防⑩

－ 子宮頸がんとヒトパピローマウイルス（HPV）ワクチン －

小宅医院　小　宅　民　子

日本では、毎年約1万人の女性が子宮頸がんと診断され、約2800人が死亡しています。近年は患者数、死亡者数ともに増加傾向にあります。

子宮頸がんは子宮の入り口である子宮頸部に生じるがんで、90％以上は、ヒトパピローマウイルス（HPV）感染が原因です。子宮頸部に感染するHPVの感染経路は性的接触と考えられます。ウイルスに感染しても約90％は細胞に異常をきたすことはありませんが、ごく一部の人ではがんになる前の段階（異形成）を経て数年から数十年かけて子宮頸がんになることがあります。

HPVワクチンは、ヒトパピローマウイルスに対する免疫を作り、感染を予防します。現在使用されているHPVワクチンは、子宮頸がんの原因の50～70％を占める2つのタイプ（HPV16型と18型）に感染するのを防ぎます。一方、ワクチンでは予防できないヒトパピローマウイルス感染もあり、ワクチンと合わせて子宮頸がん検診による早期発見も重要です。

日本では、平成15年（2013年）6月から副反応のためHPVワクチンの接種勧奨の差し控えが約9年続いていました。しかし、HPVワクチンの効果と安全性に関する多くの知見が得られたため、令和4年（2022年）4月より定期接種の積極的勧奨が再開となりました。定期接種の対象は小学校6年生から高校1年生相当の女子です。また、接種機会を逃した方には、従来の定期接種期間の対象年齢を超えて接種を行うこと（キャッチアップ接種）になりました。キャッチアップ接種の対象者は、平成9年4月2日～平成18年4月1日生まれの女性です。

子宮頸がんはワクチン接種と定期検診により予防できるようになりました。

すべてのワクチンの接種には、効果とリスクとがあります。子宮頸がんとHPVワクチンについて厚生労働省よりリーフレットなどで情報提供がなされています。かかりつけ医などに相談し、接種を受けるかどうするかご検討ください。

子宮頸がんとヒトパピローマウイルス（HPV）ワクチンの5つのポイント

- 子宮頸がんの９０％以上はＨＰＶ感染が原因
- ＨＰＶワクチンは子宮頸がんの５０～７０％を占める２つのタイプに感染するのを防ぐ
- 令和４（２０２２）年４月より定期接種の積極的勧奨が再開
- 定期接種の対象は小学校６年生から高校１年生相当の女子
- 子宮頸がんはワクチン接種と子宮頸がん検診により予防できる